

革命」の物語』弘文堂。

シンジルト著

『民族の語りの文法——中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育』

東京、風響社、2003年
356頁、4,000円（+税）

尾崎孝宏*

本書は、著者が2002年3月に一橋大学大学院社会学研究科へ提出した博士論文を加筆修正したものである。主たる考察の対象地域は青海省河南モンゴル族自治州（河南蒙旗）とその周辺地域であり、資料的には1999年5月から2000年3月までの本調査を中心に、1995年から2003年に至るまでの現地調査におけるいわゆるフィールドデータと、現地で入手した文字資料が主となる。

さて、本書の目的は冒頭部に明示されているように「民族の語り、そしてその語りの文法に関する民族的研究である」（p.1）。さらに続けて、「ここで、『語り』を強調するのは、民族は実体としてどこかに『ある』ものでない」点、「語りの『文法』を強調するのは、語りは恣意的でない」点が指摘され、「『ある』ものではないにもかかわらず、民族がそれを語る者にとってリアルであるのはなぜか」という問いが発せられている（p.1）。まずはそれが具体的に意味するところを、本書の序文と結論部を見比べた上で再構成してみたい。

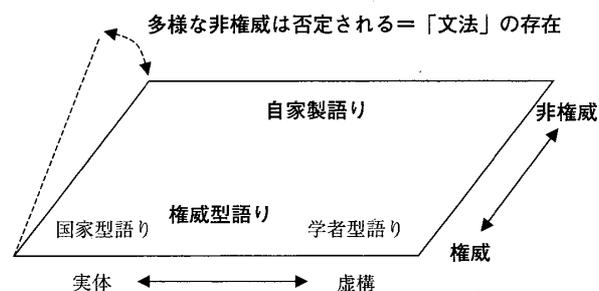
著者の理論的矛先は、まず「民族の『虚構性』に過度に傾斜する理論研究」および「モンゴル学という地域研究におけるモンゴル（人、族）を本質的に表象してきた主流的言説」に向けられている（p.304）。詳細は第一章・第二章の紹介で述べることにするが、後者はあまりに画一的なモンゴルイメージを提供するがゆえに、そこからかけ離れたモンゴル人を「中心から周辺を見下ろす姿勢」

（p.79）で解釈する抑圧の理論として作用してしまうことが問題となる。その一方で、前者は現場の人々が民族という語りを生成する以上、上述の実体論とは重ならないにせよ、彼らは何らかのリアリティを共有しているという現実が存在することを、所詮は語りの一モードでしかない理論の側から「虚構である」と否定しても不毛であることが問題となる。その中で著者は、現場の現実から理論構築を目指すという第一歩を踏み出す。

ただし、ここでまず解決しておくべき理論的問題が存在する。著者の目線は現場の「語り」のレベルにおかれているが、これを著者の批判する、実体論的モンゴル地域研究つまり「国家型語り」（p.2）と唯名論的民族論つまり「学者型語り」（p.2）との関係において、どういう位置に置くのか。最も素朴な解決方法の一つとして、両者の中間に折衷的な位置を設定することが想像できる。ただし、これは両極の側から「中途半端」を指摘される恐れのある二正面作戦となり、明晰な理論性を追求する立場としては得策ではない。

そこで著者の採った戦略は、論点を一次元上ではなく、二次元上にプロットするという方法である。即ち、上述の二つの批判対象を「権威的語り」の側へまとめて押しやり、その反対側に著者の調査現場で生成されている「自家製語り」（p.3）を対置する。

だが、このポジションは同時に、現場の「民族的状況を生きる生活者の語り」（p.304）は、「複雑」（p.3）ではあるものの「彼らにとってそれは『矛盾』ではない」（p.3）、つまりその場の都合で機会主義的に語られているわけではなく、「自家製語り」なりの首尾一貫したロジックが存在する



図：著者の議論の位相

*鹿児島大学

ことを示す必要性を著者にもたらす。というのも、それ無しには「権威的語り」に対する反対の極としての「自家製語り」という図式は成立せず、「生活者の語り」は単なる「非権威」という周縁を構成するのみだからである。

換言すれば著者は、議論の範囲が「多様な非権威のあり方」として三次元空間に拡散せず、「国家－学者」の軸と任意の一方向の「権威－非権威」の軸を含む平面上に現地調査の現場で生成される「自家製語り」の個別例を配置しうることを表明する必要性に迫られることになる。これに対応して著者は、「自家製語り」のロジックすなわち「文法」の存在を主張し、その実証的跡付けを本書各章で示すデータに基づいて行うのである。

第一章は「理論研究における民族の語り」と題され、まず行われているのは著者の学問的アイデンティティの基盤である「民族」学（人類学）における民族論のレビューである。そして、先行の諸理論は「原初主義的な観点と近代主義的（道具、発明論的な）観点」に二分可能であり、後者の立場を取るのが「一種の流行となっている」と結論付ける（p.34）。ただし、「いかなる理論もそれをつくる人の想像力やその想像力を必要とする時代や社会ないし政治的な背景があつてこそ成り立つ」点から、流行の後者もまた「その社会や時代の需要を代弁したものに過ぎない」と論じ、上述の二者はいずれが正しいかという問題であるよりはむしろ語りのモードの違いでしかないと位置づける（pp.34-36）。

さて、こうした「語り」が語りの場に左右されるのだという立場から、著者は次に社会主義中国の民族理論のレビューに入る。そこでの言及の範囲は、中国民族学会の重鎮にして元全人代常務副委員長である費孝通が1988年に提唱した「中華民族的多元一体格局」論およびその背景となる中国における民族研究史、費孝通自身も関与した1950年代に始まる公定民族の確定作業である民族識別、そして多分に政治的な概念である「民族」への異論として1990年代以降現れる「族群」概念をめぐる議論などである。そして、その中から著者は、中華民族論も族群論も「更なる理論的展開は、い

ずれも公定民族の定説を抜きにしては成り立たない」（p.66）と結論付ける。

さらに本章の最終部分では民族理論に関し、議論の場が西欧主体であるにせよ中国内部であるにせよ、「程度の差こそあれ、学問も民族も政治と深く交差していることが明らかである」（p.67）との言及があるが、重要なことは上述の三要素の「因果関係自体を問うより、学問や政治の世界における民族の語り、民族をめぐる語りの体系の上層を成してきた事実を認識すること」（p.67）であると著者は位置づける。そして、それに対置されるべき存在としての「少数民族民衆の自家製の語りが重要」（p.69）であると指摘する。

第二章は、「モンゴルイメージと河南蒙旗モンゴル社会」と題され、「これまでのモンゴルにまつわる学問的な諸言及に触れつつ、その上で、対象地域の歴史と社会情勢を概観」（p.75）することが目指されている。前者について、著者は「学術世界においてこれまでモンゴルについての語りは均質的であり」、近年「モンゴル社会（人、族）の『多様化』」に着目した研究も展開されつつあるが、そうした研究動向も「研究者たちが持つ『単一モンゴル』という理念の変種として『多様なモンゴル』が浮上してきている」だけであり、「『単一であるべき』という研究者たち自身のイデオロギー」が色濃く反映されている点に変わりはないと論断する（pp.77-78）。

続いて、本書では「『モンゴル人』と自他称する人を総じて『モンゴル人』と表記」するが、それは「実体概念というよりもむしろ記述分析の作業上の仮説概念」として使用する旨が宣言される（p.81）。これは非常に賢明な戦術なのではあるが、以下のような問題点を内包している。

まず、著者のモンゴル研究批判は、具体的な事例こそ挙げられていないが評者から見ても情動的に納得できるものである。ただし、第一章で再三繰り返された政治と民族論との関連性に言及がないがゆえに、「政治情勢や時代を超越した実体としてのモンゴル民族」という、まさに著者が批判している語りの構造に、著者自身がからめ取られてしまう可能性が危惧される。

この後、著者は青海省のモンゴル人に関して「権威的語り」の側が、彼らを「チベット化」したと断ずることに対する客観性の欠如を批判するが、ここで挙げられている「権威」の主は「中華民国時代の中国の研究者」とモンゴル国科学アカデミーである (pp.82-85)。第一章で著者が指摘しているのは中華人民共和国における公定民族の「権威的語り」としての存在感だったはずなのだが、ここでは少なくとも現在の中華人民共和国の国境は越えて設定されている「モンゴル人」に関わる語り的问题となっている。これは現在の公定民族としての「蒙古族」に関わる「権威的語り」と完全に一致するものなのかどうか、検討の余地があったのではなかろうか。

なお、本章後半部の調査地概況は非常に詳細であり、中国研究者・モンゴル研究者のいずれにも馴染みの深くない当該地域に関する調査報告書としての本書を読み進めるに当たって必須の情報源となっている。

さて、その後の第三章「日常生活における民族の語り」、第四章「牧地紛争における民族の語り」、第五章「教育運動における民族の語り」は、本書の現地調査報告書としての根幹をなす部分である。限られた紙幅の中で個別のトピックを詳細に取り上げるのは得策でないと思われるので、以下では理論的枠組みを中心に紹介したい。

まず、「河南蒙旗の人々は周囲のチベット人から『ソグ』と呼ばれ、自らもそう自称してきた」(p.112) 事実が指摘され、本書の語りが「ソグ」というアムド・チベット口語をめぐって生成されることが明示される。

日常生活において彼らが民族について語る際、「我々ソグ」に対する他者として設定しうるのは主として「ウォレ (チベット人)」であり、その他に漢族・回族の総称としての「アバ」、より「(真の) ソグ」としての外部のモンゴル人が想定しうる。著者は分析概念として河南蒙旗の自称としての「ソグH」、公定民族の枠組みにおける蒙古族を指す意味での「ソグC」、他の地域のモンゴル人を指す意味での「ソグM」を提出し (p.112)、その後河南蒙旗の人々が自己および他

者をいかなる時にいかなる基準で「ソグ」あるいは「非ソグ (=ウォレ)」であると語るのか、豊富な事例を提示しつつ検討が行われる。

基本的に人々は、河南蒙旗内部の文脈では一連の「ソグH的なもの」とされる特徴に基づき、外部の文脈では「ソグC」を代表すると考えられている「ソグM」に属するいくつかの指標 (言語、容貌など) に基づき「ソグ」「非ソグ」の弁別を行っていることが著者によって明らかにされるが、こうした弁別は状況依存的であり、一種のグラデーションとでも呼ぶべき重層性を呈する点も同時に指摘され、これらがまさに彼らの「語りの文法」の見取り図であるとして読者に提示される (p.164図2)。

第四章では、河南蒙旗と周囲のチベット地域との行政的境界線地帯において発生した牧地紛争をめぐる民族の語り及以下のように分析される。著者はこの衝突を本質的に「民族間の紛争ではない」(p.228) と断りを入れているが、少なくとも少数派という自覚のあるソグHにとっては、自己防衛のためそのカテゴリーの最大化を図る過程において、ある境界線が極めて意味の大きい存在となる。つまり、ソグHが実体化する契機として牧地紛争が機能しているのである。ただし、これはあくまでもソグHの範囲内での実体化であり、これがソグCへと拡大することはない。そもそもソグHの範囲は、必ずしもソグCに包摂されるものでもなく、ソグCとは無関係に彼らの歴史的関係のコンテクストから析出されてきたものである (pp.229-232)。

一方、第五章で問題となるのはソグCとの関わりである。ここではまずチベット語を第一言語とする河南蒙旗において1985年から開始されたモンゴル語による学校教育が、県外のモンゴル族 (ソグM) との交流が増加した県のエリート層が「真の」ソグCたる要件としてモンゴル語の必要性を痛感し、内モンゴルのソグMを「真の」ソグCと同一視する一方でソグHのソグC性を自己否定する「自己の他者化」を契機とした点が指摘される (pp.257, 274-275, 285, 292)。一方、それが1996年にチベット語でのカリキュラ

ムに付加される語学教育としてモンゴル語を教育する方針へと変更された背景として、モンゴル語教育運動を通じて内モンゴルのソッゴM社会の実情、特に漢語のプレゼンスの大きさが明らかになるにつれ、ソッゴHが一時期「真の」ソッゴCの絶対条件として追求していたモンゴル語教育の重要性を相対化していったプロセスを著者は当事者たちの「語り」の分析から明らかにしていく(pp.277-278, 285-289)。

最後の第六章「結論——民族の語りの文法」では、前章までにおいて著者が述べたこと、および評者が既に先回りして述べてしまっていることが改めて主張されている。その意味でさらに付け加えるべき点はないが、敢えて一点挙げると、おそらく中国研究者なら冒頭部分から気になっているであろう「自家製語り」という用語に関連し、ここでようやくB.ワードへの言及が行われる[WARD 1965: 135, 137]。

しかし、著者はワードが言う香港水上居民の自画像としての「自家製モデル」のみならず、彼女の挙げる「主観的伝統モデル」と「内部観察者モデル」全てが、内部の当事者のイメージを描いたという意味で「『自家製語り』に基づく」と主張する(pp.304-306)。つまり著者の「自家製」の用法は、もとよりワードの用法とは異なるものであることがここで明らかにされるのである。だがそうであるなら、むしろ著者には、ワードの影を否定なく引きずる「自家製」以外の表現を使うという選択もありえたように思える。

とはいえ、本書が総じてレベルの高い民族誌であることは論を俟たない。特に単なる現状報告にとどまらない理論性の高さは、今後関連地域の研究で博士論文を書く者にとって一つのスタンダードになるものであることは間違いないだろう。

参考文献

WARD, Barbara E.

1965 Varieties of the Conscious Model: The Fishermen of South China. In *The Relevance of Models for Anthropology*. Michael BANTON(ed.), pp.113-137.

Tavistock Publications.

金柄徹著

『家船の民族誌——現代日本に生きる海の民』

東京、東京大学出版社、2003年
248頁、5,460円(＋税)

長沼さやか*

本書は著者が1998年11月、東京大学大学院に提出した博士論文を加筆・修正した著作である。書名にもみえる「家船(えぶね)」とは船上生活者のことである¹⁾。従来、家船はその生活様式の珍しさゆえに多くの民俗学者の関心を集めてきた。だがそのほとんどは家船の特異性に注目するにとどまり、学術研究に発展する機会を得なかった。やがて伊藤亜人氏、野口武徳氏らにより家船生活者の陸地定着過程に関する研究が進められた[伊藤 1983; 野口 1987]。しかしその後、ほとんどの家船が「陸地定着」を遂げてより、まとまった研究は行われなくなって久しい。こうしたなか、かつて船上生活とは無縁であった瀬戸内の豊島(広島県豊島郡豊浜町豊島)の漁民が家船生活に転換したケースを「近代的家船」と位置づけ考察している本書は、再び始められた日本の家船研究としてたいへん意義あるものである。また著者は豊島において長期にわたる綿密な実地調査を行っている。なかでも漁撈活動や漁船・漁法に関わる資料は詳細かつ豊富であり、家船研究のみならず漁民や漁業そのものに関する研究成果としてもたいへん貴重である。

本書は、序論および結論、それに二部構成となっている本論の5章からなる。第一部は第一章から第三章までで構成され、「近代国家と漁民:『近代的家船』の出現に関する考察」と題し、文献資料を読み込んだ歴史学的研究がなされている。第

*総合研究大学院大学